

平和を願い、響け歌声

川口・「ぞうれっしゃ」の合唱団

川口市の子どもや大人たちが戦争で死んでいった命を悼み、平和を願う「ぞうれっしゃ」がやってきた」を歌う合唱団が7月23日の本番へ向けて練習を再開した。2020年7月のコンサート開催を目指して19年11月に合唱団を結成したが、コロナ禍のため練習は中断していた。ウクライナ、アラブ、アフリカなど、今も続く戦火。この歌を歌う意味は消えない。

(岸鉄夫)

太平洋戦争で日本本土でも戦火が激しくなる中、全国の動物園で軍の命令で動物たちが殺された。子どもたちに人気者だった象も殺され、終戦後に生き残ったのは名古屋の東山動物園の2頭だけになっていた。東京など各地から名古屋へ向けて子どもたちを乗せて生き残った象に合うための「ぞうれっしゃ」が走った。

この実話を基に、小学校教師の小出隆司さんが絵本「ぞうれっしゃ」がやってきた」を1976年に出版。歌は藤村記一郎さん作詞、清水則夫さん作詞で86年に完成。市民が合唱団を作った。市民が合唱団を作った。市民が合唱団を作った。

川口市では、91年4月、第1回コンサートが川口市

7月の本番へ練習再開



リアメインホールで開いてから1年置きに開催してきた。今度の本番は結成以来30周年15回目の記念公演になる。

「コロナ禍のために私たちのゾウ列車はずっと停車していた。それがまた、走り出したんです」と、楽団のニュースを発行して、団

の創立時からのメンバー、荒木紀理子(のりこ)さん(68)は、練習再開の喜びを語る。

本番公演の前の年の秋ごろに結成し、本番を終える和解する方式。荒木さん「練習が中断した後も紙と酒井さん」

員との連絡を絶やさずきた。再び発車できるのはとてもうれしい」と話す。

9日、芝園町の旧芝園小体育館で開かれた練習会には2歳から80代までの市民約100人が参加した。指導と指揮は東京芸大准教授の酒井敦さん(61)。伴奏はピアノの遠藤理史(まさし)さん(44)。ともに蕨市在住。

酒井さんは片足で床を踏んで拍子を取り、時々両手を広げた。「歌詞の言葉を一つ一つ見てほしい。まっすぐに、はるかな、よのこび、とか。一つ一つの言葉にメッセージとエネルギーがある。それを受け止めて握り下げて歌いましょう」と酒井さん。

小学校6年生の古賀蒼依(あおい)さん(11)は「ずっと再開を待ってた。今日はとてもうれしい」。小3の田丸泰成さん(8)は「合唱は初めて。楽しさがいっぱいです」。2022年3月に中国から来日したばかりという中国国籍で小2の傅修さん(7)も「楽しくて面白い。でも、ちょっと悲しいお話もある」と話していた。

合唱団は団員を募集中。問い合わせは同団荒木さん(夜間のみ)0408・2008・0200へ。

指揮する酒井敦さんと川口ぞうれっしゃ合唱団のリハーサル。9日、川口市芝園町の旧芝園小学校体育館